

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：34601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02385

研究課題名(和文) 日本統治下の台湾における能楽活動の基礎研究－資料に基づく台湾能楽史の構築をめざして

研究課題名(英文) Noh actioitu Built in Taiwan During Japanese Rule

研究代表者

王 冬蘭 (OU, Toran)

帝塚山大学・経済経営学部・非常勤講師

研究者番号：80319920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：資料、情報を収集、整理、考察を通じて、台湾における能楽は観世流、喜多流、宝生流により展開され、台湾能楽界の形成、主な能楽指導者の活動、各流の主な社中、倶楽部の沿革、日本能楽師による能楽公演と現地の能楽関係者が行った上演、能舞台の建造、三流連合組織の成立や役割などについて把握した。台湾能楽展開の大体の筋道を明らかに、台湾能楽簡略史を描くことが出来るようになってきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題の日本統治下の台湾における能楽活動の基礎研究は、植民地における能楽の研究でもあり、日本能楽史と切り離すことが出来ない研究でもある。台湾能楽の主な指導者の活動、各流の主な社中、能楽公演、能舞台の建造などについての研究結果は、従来研究なされておらず、知られていないこの分野の空白をある程度埋め、今後台湾植民地統治時代の演劇研究に資料を提供することができた。

研究成果の概要(英文)：Through materials collection and investigation, the following was understood. Noh in Taiwan is consisted of Kanze ryu(school), Kita ryu(school), Hoshu ryu(school). The formation of Taiwan Noh world The activities of major Noh leaders, The history of each Noh club, The performance of Noh actors from Japan and Taiwan Japanese Noh actors (professional and amateur) The construction of Noh stage. We have grasped the brief history of Taiwan Noh.

研究分野：植民地における能楽

キーワード：台湾 植民地時期 能楽 謡曲 能舞台

## 研究成果報告

### 1、研究開始当初の背景

本研究の日本植民地統治時代の台湾における日本の伝統劇「能楽」の展開、つまり戦前台湾能楽史の解明という課題の開始時期には、まだ研究されておらず、先行研究はなかったという状況だった。本研究課題代表者である王冬蘭は、別の研究課題の資料収集を行う過程で、日本で刊行された能楽雑誌などの中に、台湾における能楽活動の記事を見出だし、その方面の資料に意を払い、収集を続けていた。資料収集を進めるうちに、国立台湾図書館など現地の図書館に当時の日本関係資料が収集保存されていることを知り、課題担当者の二人とも、台湾現地に赴いて当時の現地の新聞、雑誌を調べたところ、膨大な能楽関連資料に遭遇したが、台湾の研究者もこの分野には手を付けていなかった。

### 2、研究の目的

1895年から1945年まで五〇年に及ぶ日本植民地統治時代、台湾各地に起こった能楽（謡曲・囃子など能の略式演奏を含む）活動について、各流の展開の様相、組織の成立、主な指導者、能舞台の建造、能楽公演などの実態を解明し、従来試みられたことのない台湾能楽史を構築することを目的とする。

### 3、研究の方法

- ① 台湾の図書館に所蔵している膨大な能楽関連資料を調査、収集しながら、現地で能楽を展開した三流（観世流、喜多流、宝生流）の資料を分け、対照的に年順に整理を行う。主に調査資料は『台湾日々新報』等当時現地発刊された各種新聞、『台湾藝術新報』『新台湾』などの雑誌だ。
- ② 日本の図書館などにおける台湾能楽関連資料を調査、確認する。日本国内の能楽関連雑誌などに当時掲載された「台湾だより」「台湾消息」などを収集、年順に整理を行う。
- ③ 台湾能楽指導者の子孫、親戚などにインタビューし、彼らに情報、資料を提供してもらう。
- ④ 能楽公演した劇場（現存しているもの）や現存していないものの遺跡、能舞台の遺跡、主な謡曲倶楽部の所在地などを調査、確認する。
- ⑤ 調査、収集した資料を整理しながら、研究論文にまとめ、研究報告等を通じて、社会に発信する。

### 4、研究成果

調査、収集した資料に基づき、得られた研究成果は次のとおりである。

#### **(1) 主な指導者が台湾で行った活動概況を把握した。**

日本統治期の台湾における能楽は、観世流、喜多流、宝生流という三流の流派により展開され、金春、金剛はほとんどなかった。上記の三流の指導者が台湾能楽展開にとっても大きな役割を果た

したので、各流の主な指導者の活動地域、形式、持続時期、影響などの解明に着眼して、以下の主な指導者の事情を詳しく考察し、明らかにした。

① 小川尚義について

小川尚義は著名な語学学者であり、台湾「能楽第一人者」と言われた。当時の台北帝国大学教授であったが、下掛宝生流、葛野流大鼓の達人であり、在台期間（1896～1936）謡曲、大鼓の指導、能楽の上演の核心人物の一人であった。素人であるが、台湾能謡界にとっては権威的な存在であった。

② 桂六平について

桂六平（在台時間 1902～1916）は喜多流専門指導者として喜多流専門指導者八戸岩三郎（在台湾時間 1906～1916）と協力したことより、台湾における喜多流の隆盛を促進し、台湾の能楽展開の先駆者だと言われる人物である。

③ 大村武について

大村武は1909年に家族と一緒に渡台、1914年一七歳の時に東京へ、喜多六平太に入門、1922年に職分になり、台北に戻り、台湾の第二代謡曲指導者として活躍し、台北の自宅で本格的な能舞台を建造した。敗戦するまで自宅で謡曲の指導をしながら、台北市内の出張指導、台湾中南部までの出張指導をした。また、日本から能楽師を招聘することにも力を注いだ人物である。

④ 観世流伊藤六三について

伊藤六三は1914年から、約三〇年間台湾の高雄を拠点として、台北などまで、当時の台湾南部から北部までの鉄道沿線の多数の都市で謡曲指導を行った人物である。彼が1935年頃から「台湾だより」第1話から1943年6月までの第56話を八年間前後まで持続して日本国内で発行された『謡曲界』に投稿した人物である。

⑤ 田中基次について

自称「五軒家素謡宗家」の田中基次は観世流の謡曲指導者として招聘され、1909年秋から1912年まで台湾滞在し、観世倶楽部、観世会の指導を行った人物である。

**(2) 各流の主な社中、倶楽部の概況を把握した。**

日本が台湾を統治していた五〇の間の能楽を前期と後期に分けることができると考え、前期は日本の台湾統治の初期から1910年代後半ごろまで、後期は1910年代後半ごろから1945年ごろまでである。後期は第2代指導者が主に活躍するようになる時期である。

観世流の方は、早い時期、おそらく1900年前後に社中指導者が台北で動いたが、指導者の変動が大きく、長く指導した者が少なかった。喜多流の場合は、主な指導者の活動展開は観世流より遅かったが、長く継続的に指導した者がいた事が特徴的である。宝生流は専任指導者がいなかったようだが、社中があった。

台南は観世流「一点張り」と言われ、観世流の愛好者の人数が多かったが、宝生流社中も存在した。

前期には観世流の温声会、観諷会、観世倶楽部、晴雪会、高砂会、喜多流の一音会、喜多

倶楽部、宝生流の宝雲会、五雲会、紫雲会、台宝会、松風会という社中の存在を確認した。

後期には、観世流の晴雪会、鉄道同好会、九阜会、喜多流の喜多会、喜多会婦人会、宝生流の台北宝生会、台湾南部における蘆葉会、台鉄観世会、高雄観世会、清香会（婦人会）、扇友会（仕舞）等観世流の社中の存在、台北における囃子の社中紫苑会、温鼓会、狂言の社中鷺流狂言会の存在を確認した。

### （3） 能楽公演、上演の状況を把握した。

能楽の上演は、日本から来た能楽師による台湾公演と、現地の能楽関係者が行った上演がある。日本から来た能楽師が催した能楽公演は五回の記録が管見に入っている。五回のうち、喜多流の公演は四回あり、喜多流は台湾公演する事に他流より力を入れたことが分かる。最初の公演は喜多流の宗家の1905年10月台湾神社（台北、祭神北白川宮久親王）の例祭における神前能だった。以上の五回の公演の際には、現地の能楽関係者も上演に参加した。又、一九二〇年代以後の上演は、巡演の形で、台北、台中、台南、高雄と各地で上演を行った。

台湾の能楽関係者が行った上演は1910年代ごろから主に台湾神社の例祭、1928年以後建功神社（台北）の招魂祭に奉納能上演は続いて行われた。いつも在台の三流の関係者が総動員し、いわゆる異流共演で、かろうじて上演を続けた。台湾神社の例祭の上演の際に、仮設舞台を造らせた。その上演は当時台湾神社の例祭の余興であった、余興には相撲等いろいろな出し物があった。これらの余興は公園、神社という公開場所で上演されたので、毎年見た人の中には台湾人もいと推測される。

能楽は在台の日本人の趣味的な存在であり、また、異地における日本人の文化郷愁の表現の一つであると考えられるが、毎年の能楽公演は植民地統治の政治に協力した点は否定してはいけないということを指摘しなければならないと考えられる。

### （4） 能舞台の事情を把握した。

台湾での大規模な能楽上演は仮設舞台や公会堂等劇場で行われたが、小規模な能の上演や謡曲会等の開催や稽古用としても使える能舞台も造られた。台北で大村武宅における喜多能舞台、高雄で伊藤六三宅における舞台が造られた。喜多能舞台の製造時期は1924年11月であり、伊藤六三宅舞台の方は1924年4月であり、同じ年だった。大村武宅における喜多能舞台は本格的な大きさであるものが、高雄の伊藤六三宅における舞台は、敷き舞台の可能性が高いと考えられる。大村武宅における喜多能舞台の場所、様式、建築経緯を考察し、その遺跡の一部が現存されていることを確認した。

### （5） 三派連合事情を把握した。

三派、すなわち観世流、喜多流、宝生流三流が頻繁に連合して行事を行った。たとえば、台湾現地の人々が行った能楽上演会は、すべて三派連合だった。これは一つの流派だけでは役を揃えることができなかつたため、植民地における能謡界の共通点であった。

台湾には三流連合の組織も二つできた。一つは「高砂会」、もう一つは「三隆会」であった。三隆会は三派の個人の集合会であることに対して、高砂会は三流派の連合会である。三流派の連合行事、つまり台湾における能楽の或る程度大きな規模の行事の開催は高砂会に

より執行されたことが分かった。

#### まとめ

本研究は現地発行された新聞、雑誌の記事や報道、総督府文献などの資料に基づき、台湾における主な能楽指導者の活動、各流の社中、倶楽部の概況、能楽公演、上演の状況、能舞台の建造や利用などについての考察により、日本統治下台湾の主な地域である台北、台南、高雄などにおける観世流、喜多流、宝生流の展開状況を大体把握し、簡略台湾能楽史を描く事ができるようになり、当初の「台湾能楽史の構築をめざす」という研究の目標にある程度達していると考えられる。しかし、「台湾における能楽」というこの研究に関する資料はかなり膨大であり、台湾における能楽指導者の活動、各流の社中についてさらに深く掘り下げなければならない部分もあり、また、戦前、在台の能楽関係者には本島人（台湾人）に能楽を押し広めようという主張があったが、実行は出来なかった。その深層原因は何であろうか？また、本研究で解明した台湾における能楽展開事情は、当時日本国内の能楽界の動向とどのような関連があるか、台湾における各流の能楽指導者の引き揚げ後の状況などは、今後の課題として研究展開したいと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 王冬蘭	4. 巻 19
2. 論文標題 桂六平と能楽雑誌『能海』－植民地台湾における能楽の一考察－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 演劇学論叢	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 王冬蘭	4. 巻 227
2. 論文標題 日本統治下台湾における能舞台	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 藝能史研究	6. 最初と最後の頁 22 38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 恵阪悟	4. 巻 1
2. 論文標題 近代能楽史の一端 台湾における能狂言	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 2018年和漢比較文学検討会論文集(台湾大学日本語文学系刊)	6. 最初と最後の頁 131 - 137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 王冬蘭	4. 巻 27
2. 論文標題 日本統治下の台湾における「能楽第一人者」小川尚義について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 帝塚山経済・経営論集	6. 最初と最後の頁 117-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 王冬蘭
2. 発表標題 戦前、台湾における能楽
3. 学会等名 藝能史研究会(5月例会予定だが10月に延期)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 王冬蘭
2. 発表標題 戦前、台湾における観世流謡曲師範伊藤六三について
3. 学会等名 六麓会12月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 王冬蘭
2. 発表標題 台湾における能舞台
3. 学会等名 第55回藝能史研究会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 惠阪悟
2. 発表標題 近代能楽史の一端 台湾における能狂言
3. 学会等名 和漢比較文学会海外特別例会（於台湾大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 王冬蘭
2. 発表標題 台北能舞台
3. 学会等名 2017年獅城國際戲曲學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 王冬蘭
2. 発表標題 戦前、台湾における能謡界
3. 学会等名 第30回能楽フォーラム「近代の演能空間 - 今考える「外地演能」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 王冬蘭
2. 発表標題 日本統治下の台湾における「能楽第一人者」小川尚義について
3. 学会等名 六麓会（関西における能楽研究会）例会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	恵阪 悟 (ESAKA Satoru) (20708979)	帝塚山大学・文学部・講師  (34601)	